

第1回東海摂食栄養フォーラム

申請者：たけうちファミリークリニック

武内有城

助成対象年度：2014年度前期

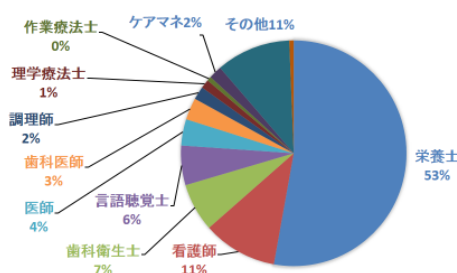
提出年月日：2015年7月3日

第1回東海摂食栄養フォーラム

病院から在宅までの食支援に関わるには幅広い知識と地域の繋がりが必要である。今回、食支援に関わる職種の知識の向上と情報交換を目的に、4つの食に関わる研究会（①在宅栄養支援の和（在宅栄養）②HEIWA(Hirabari Eiyou Information Working Association)（栄養・地域連携）③東海嚥下食研究会（嚥下調整食）④嚥下研究会食楽（嚥下障害））が共同して東海摂食栄養フォーラムを開催した。その取り組みを報告する。

東海摂食栄養フォーラムを開催するにあたり、各研究会の代表が平成25年12月から平成27年1月まで6回の打ち合わせで企画運営を行った。イベントは講師を招き、認知症（講義・グループワーク）、嚥下障害（嚥下調整食・評価・在宅栄養）、実習（調理・嚥下機能評価）、活動報告会をテーマに、各研究会のスタッフ53名で運営した。参加者は355名で14の職種が参加した。

全体(参加職種)



【講義の内容】

講義は選択できるようにし、下記の通りとした。

嚥下障害

- a「嚥下調整食」：藤谷順子先生（国立国際医療研究センター）
- b「摂食嚥下障害の評価と訓練の実際」：戸原玄先生（日本大学歯学部摂食機能療法学講座）
- c「在宅での食支援」：江頭文江先生（地域栄養ケア PEACH 厚木）

認知症

- d「認知症における摂食嚥下障害」：平野浩彦先生（東京都健康長寿医療センター）
- e「認知症への関わり」：藤谷順子先生（国立国際医療研究センター）

実習

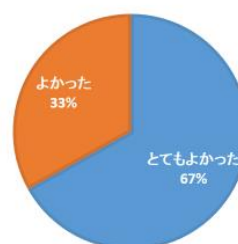
- f「嚥下機能評価」山本美和先生（旭労災病院）・立花広明先生（西部医療センター）
- g「在宅で生かせる嚥下調整食」：徳永佐枝子先生（中部ろうさい病院）
仁木由英子先生（医療給食）

演題発表 座長：奥村圭子先生（長寿医療センター）

【参加者へのアンケートの結果】

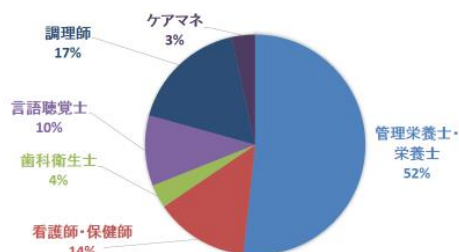
アンケートの回収率44.9%、全体の満足度は「とても良かった」「良かった」が100%、調理実習は97%が「十分理解できた」「理解できた」

全体の満足度

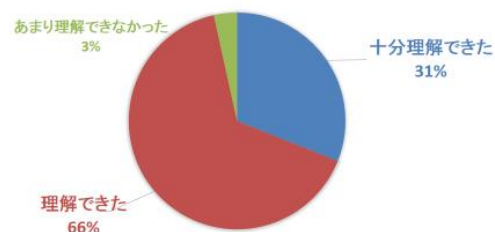


で次回も参加希望が 100%、嚥下機能評価は「十分理解できた」「理解できた」が 100%で
 次回の参加希望も 100%と極めて良好であった。

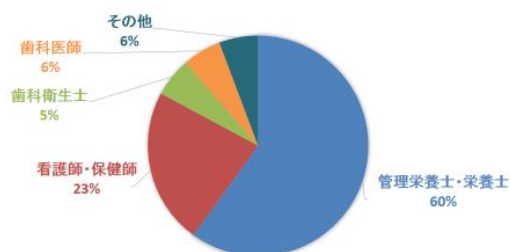
調理実習参加職種



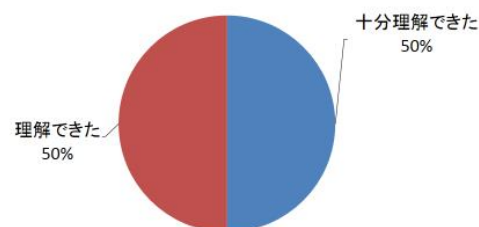
調理実習結果



嚥下機能評価(実習)参加職種



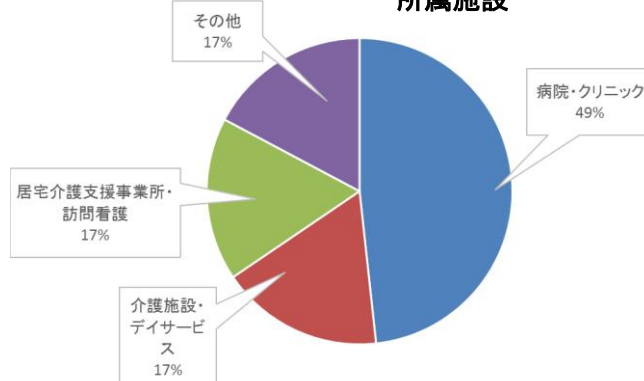
嚥下機能評価(実習)



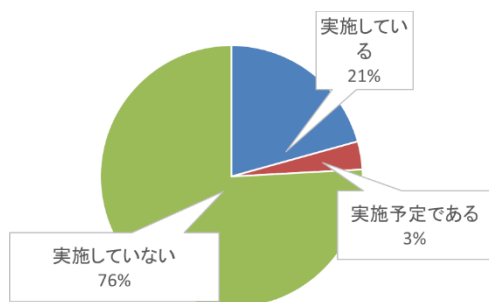
【調理実習】

参加者の所属する施設は半数が
 病院で、次いで介護施設と訪問看護
 であった。日常業務で嚥下食の作成
 をしているのは21%と少なかった。
 今回の実習で役に立ちそうな献立
 が多く、白和え、味噌かつ、鳥団子
 の雑煮の順であった。

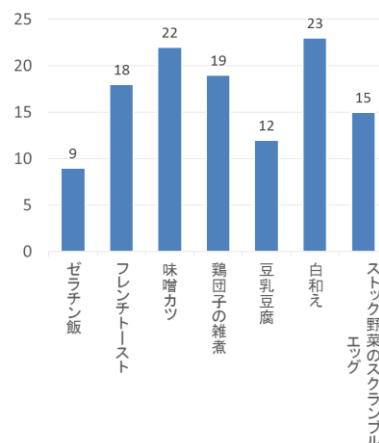
所属施設



日常業務で実施しているか

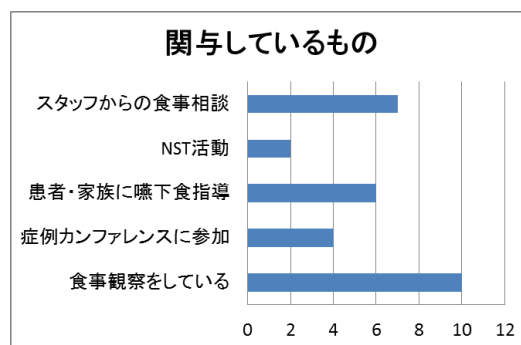
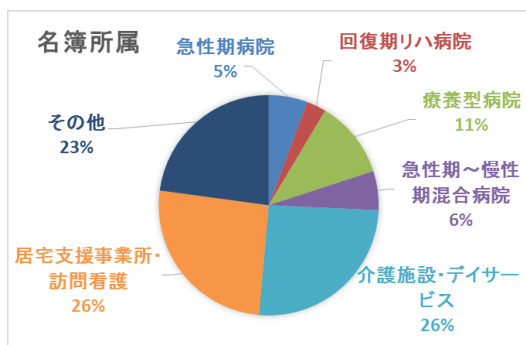


役に立ちそうな献立



【嚥下機能評価】

参加者の所属は訪問看護、介護施設が多く、参加者の半数は管理栄養士であった。認定看護師や言語聴覚士のいない施設での取りくみも多く、摂食嚥下に対する関心が深いと考えられる。実際に食事の観察を行っている参加者が多く、嚥下機能の評価ができると更に食事の観察が効果的に行えると考えられる。

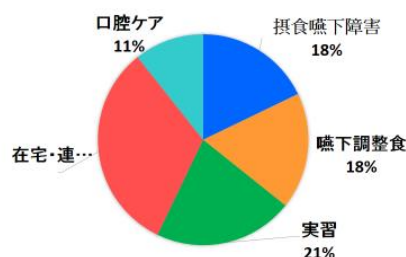


講義は選択でき、実習やグループワークについては好評な声が多かった。今後、希望する内容としては栄養・嚥下調整食・嚥下障害への興味が高かった。また、アンケートには13名の方が今後の活動を共同することを希望した。

【まとめ】

食支援に異なる角度から関わる4つの研究会であったため幅広い情報提供が行えた。参加者はその中から選択して受講できたため高い満足度につながったと考える。各実習や認知症のテーマは募集後すぐに定員に達し、関心の高さがうかがえた。1年を通して打ち合わせを行ったため、スタッフ間でも幅広く情報交換を行うことができた。そのため、研究会同士の交流も増し、以前よりも強固に連携をとれるようになった。このような活動は継続と拡大が重要であり、地域のニーズに合った内容で継続することで、より隙間の少ない食支援に繋がると考える。

今後、希望する内容



本研究は公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による助成を受けている。